

氏名（本籍）	奥村 直子（東京都）		
学位の種類	博士（児童学）		
学位記番号	博乙第9号		
学位授与年月日	平成29年3月15日		
学位授与の条件	学位規則第3条第3項 該当 児童学研究科 児童学専攻		
論文題目	「ピアノ遊び」を通じた子どもの主体的な表現形成要因の研究 —14年間の追跡データの分析を通して—		
論文審査委員	主査 教授	増井 三夫	
	副査 教授	有働 玲子	
	副査 教授	八木 正一	

**論文内容の要旨**

1 先行研究の成果と課題

本研究のテーマである家庭における子どもの「ピアノ遊び」に直接かかわる先行研究は非常に限定されている。その中で注目される研究として、欧米のピアノレッスンの導入期における業績が、「ピアノ遊び」にかかわる研究と捉えることができ、それらの先行研究の成果は次のようにまとめられる。子どもの音楽的活動において、「音楽的自主性」、「自己表現」、「自己の内面世界の表出」、「積極的な探索活動」が子どもの音楽的成長や主体的な表現形成にとって重要であり、自由な表現活動の場である家庭において行われる「音楽遊び」の意義が確認されたことである。国内の研究においても、上記の研究成果を引き継ぎ、家庭における「音楽遊び」をテーマにその具体的活動に注目しているが、いずれの研究でも、子どもの継続した実践とその検証が課題としてあげられている。とりわけ求められている点は、長期にわたるフィールドワークと分析である。子どもの上記のプロセスは子どもの成長にそっていくために、継続的研究は常に求められている。しかし、その実践現場が家庭であるため、長期間のフィールドとしての確保と分析することの困難性が課題として残されていた。

以上の先行研究の成果を継承し、残された課題に応えるために、本研究の目的は、遊びの性格を備えた「ピアノ遊び」が、幼児期から児童期において子どもの主体的表現の形成にどのようにかかわっているのかを、キーパーソンB男と対極者A子の家庭で行われる「ピアノ遊び」に着目し分析する。それにより「ピアノ遊び」を通じた子どもの主体的な表現形成の過程にかかわる主要な要因を明らかにし、その理論仮説を提示するものである。

## 2 研究方法

本研究は、観察対象児の家庭における子どものピアノへのアプローチを連続的に捉える方法として、家庭をフィールドとしたフィールドワークの手法によって情報の収集を行った。収集したデータを分析するにあたっては、実践の理論化を試みる代表的な質的研究法である Grounded Theory Approach (GTA) の手法を用いる。GTA では、段階的に手順を追って理論仮説の構築を行う。分析手順は、①研究課題の明確化、②研究テーマの選定、③データの収集、④データの切片化、⑤特性の識別、⑥概念の生成、⑦カテゴリーの生成、⑧カテゴリーの説明と定義、⑨カテゴリー構成図の作成、⑩コアカテゴリーの生成、⑪ストーリーラインの生成、⑫理論仮説（グランデッド・セオリー）の生成、⑬カンファレンス、である。本研究は、「聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委員会」の承認を得て実施した。

## 3 データ

期間は、2000年3月～2013年12月である。観察対象児家庭においてA子と母の「ピアノ遊び」を見ている第2子B男をキーパーソンとし、すでに自発的に「ピアノ遊び」を楽しんでいる第1子A子に対極者として位置付けた。データは、家庭にあってB男の自発的な「ピアノ遊び」の行動に限定し、A子とのかかわりも視野に入れてフィールドワークを行った。観察スタート時点では、子どもは2人姉弟であったが、その後、4人の兄弟姉妹となった。第3子C子、第4子D男に関しては、B男の「ピアノ遊び」に直接のかかわりがある場面のみ本研究の事例として採用した。通算14年間を通して、139日の家庭観察の中で、子どもたちの「ピアノ遊び」が表出した場面が115日、キーパーソンB男のピアノ行動は72日観察された。そのうち対極者A子との「ピアノ遊び」にかかわる19事例25場面を採用場面とした。資料として、ビデオ映像、インタビュー記録、フィールドノート、母の日記、ピアノレッスン記録ノート、発表会練習記録表等を使用した。

## 4 結果

GTAにより、以下のストーリーラインと理論仮説が生成された。

### 4-1 ストーリーライン

1) 「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現は、特質が未分化な導入期にあって、ピアノで遊び、表現する意欲に表れる。子どもはピアノに興味を持ち鳴らしたいと思い、一緒にピアノで遊びたいという意欲的行動は、聴いてまねて弾き遊ぶ自発的行動となり、自身の気持ちをピアノで表現しようとする。2) 「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現は、特質が分化される展開期となりピアノ技術の競合関係が表れる。子どもは、ピアノ技術向上への願望を持ち、他者より上手になりたいとピアノ技術向上への競い合いが起きる。しかし練習時間などでのピアノの取り合いも乗り越え、ピアノ共有への交渉もでき、ピアノ技術向上への認め合いの関係も築いていく。3) 「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現は展開期にあって、憧れを抱いて努力する充実感に表れる。子どもは憧れを抱き達成への期待感を持ち、忍耐強く挑戦する持続性を持ち、憧れの曲を夢中で弾く充実感

を味わう。4)「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現は、共に歌い弾く楽しさを享受する姿に表れる。子どもは家族とピアノに合わせ歌う一体感や連弾による音楽の生成を楽しむ中で、ピアノを通して周囲への配慮もするようになる。5)「ピアノ遊び」を通した子どもの主体的な表現は達成期となり、囚われず表現し、思うがまま演奏する喜びとなって表れる。子どもは表現力豊かな演奏を志向し、曲をアレンジして楽しむなど、心の赴くままに弾ける満足感を味わえるようになり、「ピアノ遊び」の全過程は統合される。

#### 4-2 理論仮説

「ピアノ遊び」を通した【あるがままの自分を表現する喜び】は、子どもの主体的な表現形成の主要因。

#### 5 考察

生成された理論仮説の妥当性については、スーパーバイザーとピアノ指導者・音楽指導者とのカンファレンスを行い、理論仮説の妥当性の検証をおこない合意を得た。本研究の成果として、1)「ピアノ遊び」を通して主体的な表現形成にかかわる5つのカテゴリー、【ピアノで遊び、表現する意欲】、【ピアノ技術の競合】、【憧れを抱き努力する充実感】、【共に歌い弾く楽しさを享受】、【囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び】が見出された。2)「ピアノ遊び」を通した主体的な表現形成過程は、特質が未分化な導入期、分化してくる展開期、統合される達成期の3段階を辿って発展していくことが明らかになった。3)「ピアノ遊び」を通した主体的な表現形成過程にあって、【あるがままの自分を表現する喜び】というコアカテゴリーが主要因となり、5つのカテゴリーの具体的な活動に関連し合いながら、主体的な表現形成過程の導入期・展開期・達成期の3つの段階を経て、5つのカテゴリーが発展していくことが明らかになった。4)以上の3点に基づいて、主体的な表現形成の理論仮説を生成することができた。5)本研究は、困難と思われていた長期にわたる継続的な実証研究を行い、GTAという質的な研究方法により、先行研究の課題に一定の貢献をなし得ると考えられる。6)本研究により、主体的な表現形成と音楽的な成長が対をなしていることを見出すことができた。それにより3つの段階と5つのカテゴリーは、自由で音楽的な表現活動の発展する段階と特質を、個々の子どもに即して評価し、同時にそれを改善する処方箋的な観点を提示することが出来た。

#### 6 課題

1)本研究は長期間のフィールドワークであったため、対象児家庭が1事例であり、カテゴリーと理論仮説について、多様な対象者による調査によって計量的な検証を行っていきたい。

2)対象児が4人の兄弟姉妹であったことで、少子化の現在では、1人か2人兄弟姉妹が一般的であるという観点から、子どもの人数の検定を1人、あるいは2人兄弟姉妹以上というケースを取って仮説の精緻化と妥当性の検討を継続して行う必要がある。

## 博士論文審査結果の要旨

### 博士論文審査の要旨

審査委員会は「博士課程の学位論文審査等に関する内規」第 15 条に基づいて博士論文等審査を下記のように実施した。

#### 1. 公開試問

公開試問は平成 29 年 1 月 28 日（土）14 時～15 時に実施された。発表についてはパワーポイント及び配布資料（論文要旨）にもとづいて理路整然と行われた。発表内容、及び主に主体的な表現活動の展開に関わる応答の内容については、十分学術発表としてのレベルを満たすものであったと評価できる。

#### 2. 審査委員会

審査委員会は、公開試問終了後、別室にて博士論文の可否を審議した。その結果、審査委員全員一致で論文内容は学位論文として価値あるものと判断した。その後、最終試験を実施し、奥村直子氏は博士の学位取得に相応しい学識を有するものと判断でき、以上の結果を研究科委員会に報告することとした。

#### 3. 博士論文の内容と成果

##### (1) 論文構成

本論文は、はじめに、4 章、おわりにから構成され、本文 175 頁、資料 25 頁（文字 10.5 ポイント、27 行×45 字）からなっている。

##### ○先行研究

本研究のテーマとなる〈家庭における子どもの「ピアノ遊び」と主体的な表現形成〉に直接かかわる先行研究として、Mursell, J. L(1971)、Cavaye, R(1987)、Mcdonald, D. T (1999)、Lehmann, A. C(1997, 2007)、Colwell, R. W(2011) 及び西村志風（1987）、梅本堯夫（1999）、藤巻真由美（2006）、関戸洋子（2008）、奥村直子〈2008, 2010, 2014〉等が上げられる。これらの先行研究の成果と課題は次のようにまとめられる。自由な表現活動が展開されている家庭環境での「ピアノ遊び」において、「音楽的自主性」、「自己表現」、「自己の内面世界の表出」、「積極的な探索活動」といった幼児と子どもの主体的な表現形成が展開されると指摘されている。しかし、かかる主体的表現形成の主要因の解明と実証は課題として残されており、幼児と子どものかかる「ピアノ遊び」に関する長期にわたるフィールドワークと分析による実証研究が待たれている。

### ○研究目的

本研究は、遊び自体の性格を備えた幼児期から児童期における「ピアノ遊び」が、子どもの主体的表現の形成にどのようにかかわっているのかを14年間追跡し、かかる主体的な表現形成にかかわる主要な要因について理論仮説を提示するものである。

### ○研究方法

収集したデータを分析するにあたっては、実践の理論化を試みる代表的な質的研究法である Grounded Theory Approach (GTA) を使用している。なお本研究は、「聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委員会」の承認を得て実施した。

### ○データ収集

2000年3月～2013年12月、139日に渡るY家のデータ

### ○結果

19事例25場面より17の概念と5のカテゴリ「ピアノで遊び、表現する意欲」、「ピアノ技術の競合」、「憧れを抱き努力する充実感」、「共に歌い弾く楽しさを享受」、「囚われず表現し、思うがまま演奏する喜び」を相互に関連づけ、主体的な表現形成を展開する主要因である《あるがままの自分を表現する喜び》というコアカテゴリーが生成された。この理論仮説についてピアノ指導者5名とのカンファレンスを実施し、その妥当性について合意を得ることができた。

## (2) 成果

本論文の一部をなす奥村直子氏の研究はすでに日本音楽教育学会で評価されているが、課題となっている実証研究としては、この研究について周知している審査員は、「14年にわたるフィールドワークは例がないと」と評価しており、本学位論文は内外においてこの分野における本格的実証研究と認められる。また幼児期における幼児の主体的な表現活動に関わる基礎研究としても評価された。

## (3) 課題

「ピアノ遊び」の用語の限定について、とくに「あそび」について、論文の具体的な考察で「主体的な表現活動」を射程に入れて考察しているので、それを結論の箇所でも明確に定義づけることが今後この研究をさらに発展させた成果を発表するさいに求められる。さらに、本研究の理論仮説を、Y家の条件を超えた家庭及び幼児教育の現場でも活用できる一般理論化するために、継続して実証研究に取り組むことが期待された。

## 試問の結果の要旨

### 1. 公開試問

公開試問は本学 3 号館 3807 教室において平成 29 年 1 月 28 日（土）14 時～15 時に相良順子研究科長補佐進行のもとで実施された。発表については、研究目的の設定、先行研究の検討、データ解析結果、考察について、パワーポイント及び配布資料（論文要旨）にもとづいて理路整然と行われた。発表内容、及び主に主体的な表現活動の展開に関わる応答の内容については、十分学術発表としてのレベルを満たすものであったと評価できる。

### 2. 最終試験

審査委員会は、公開試問を受けて、別室にて博士論文の可否を審議した。その結果、審査委員会は、本論文内容が学位論文として価値あるものと判断し、全員一致で合格と認めた。その後直ちに口述による最終試験を実施した。研究課題の設定、14 年間の追跡データ収集の方法と主体的な表現形成のプロセスの質的分析による仮説生成、及び本研究成果のオリジナル性に関する回答について、奥村直子氏は博士の学位取得に相応しい学識を有するものと判断でき、以上の結果を研究科委員会に報告することとした。